

理想的な教師間協働を経験している教師の語り

—SCATによる構成概念と理論仮説—

中山英治（大阪産業大学）

門脇 薫（摂南大学）

高橋雅子（早稲田大学）

Qualitative Analysis by the SCAT method about the Ideal Teachers' Collaboration

Eiji NAKAYAMA (Osaka Sangyo University)

Kaoru KADOWAKI (Setsunan University)

Masako TAKAHASHI (Waseda University)

キーワード： 教師間協働，タイ，自己認識，協働の可能性

Keywords： Teachers' collaboration, Thailand, Self-recognition, Chance for collaboration

SUMMARY

In this paper, we considered the reality of the ideal collaboration between the teachers and analyzed collaborative way and good ideas. As a result, we knew importance of an information sharing and enough communication between the native teachers and the non-native teachers. Japanese language teachers can reform self-recognition in the ideal collaboration and can also deepen their understanding to a chance for collaboration.

1. はじめに

本研究は、タイの日本語教育現場機関におけるタイ人日本語非母語話者教師（Non-native teachers, NNT）と日本人日本語母語話者教師（Native teachers, NT）の理想的な教師間協働の実態の解明とそこから得られる協働の実践的な方法や工夫を抽出して、タイにおける教師間協働の促進や改善を目的とする研究である。

本研究で主張することは、以下の通りである。

- (1) SCATによる質的な分析で、理想的な教師間協働の実態解明に有効な構成概念を抽出した。例えば、「常日頃からの情報共有」、「雑談感覚のコミュニケーション」、「企業から学んだ組織感覚」、「協働の可能性」などがあつた。

(2) 抽出された構成概念から、次のストーリーラインと理論仮説を記述した。

【理想的な教師間協働を経験している日本語教師のストーリーライン】

理想的な協働を経験する NT は、日頃 NNT との仕事の中で、日本語も使用した雑談のようなコミュニケーションや情報共有を通じてお互いの仕事や協働への理解を深めていく。そして、「日本語教師」の自己認識をこえた「教師」としての自己認識に至り、教育への責任感と覚悟を強化する。また、日本語教師では「ない」立場から、日本語教師に「なる」過程の中で協働に適応できる立場や能力を獲得する場合がある。同時に NNT にも協働の可能性や協働上の対等性・平等性への気づきがある。

【理想的な教師間協働を経験している日本語教師の理論仮説】

- ・理想的な教師間協働は、情報共有と不断のコミュニケーションを通じて、NNT と NT の相互理解の中ではぐくまれる。
- ・理想的な教師間協働は、NT の「教師」としての自己認識を再形成する。
- ・理想的な教師間協働は、NT 及び NNT の「協働の可能性」への気づきにつながる。

2. 本研究の背景と質的研究の動機

2.1 本研究の背景

タイの教師間協働については、先行研究による蓄積がある。そもそも、教師同士の協働という事象に研究対象としての価値を見いだした研究は、池谷他(2009)である。この研究では協働を実践した NT や NNT にインタビュー調査を行い、その語りのデータを M-GTA 法により協働体験の仮説モデルをタイで初めて提示した。また、この研究から派生して、カノックワン(2010)は、特に協働体験をしている NNT にフォーカスを当てて、NNT の指導観として『正確さ』¹重視の指導観を指摘し、その影響から NNT が感じる『不安感・劣等感』や NT へ求める《役割》を抽出した。これは、役割分担の指向性を持つ NNT の内面を鋭く追究した研究である。さらに、片桐他(2011)は、協働における NNT の《協働による学び》と『協働拒否』の分岐点を明確にし、前者における「成長する教師」へのパラダイムシフトへの可能性を指摘してタイの協働の研究水準を上げることに成功している。

こうした協働の研究の系譜に香月(2011)や松尾(2014)が続き、協働の実態解明に有効な【情報共有】や【相互補完】といった概念や量的調査による NT の様々な方略を取りだしている。また、高橋他(2015)は、日本語教育分野における教師間協働に関する文献調査を行い、今後の協働の研究に対する示唆を与えている。NNT と NT の協働が重視される高校を対象とした門脇編(2015)では高校の協働の実態を量的に捉え、包括的な分析を行っている。

このようにタイにおける教師間協働の研究は、研究の蓄積が見られるが、課題も残っている。それは、質的な調査を行って抽出される構成概念同士の関係が明確ではないことや NT の仕事観と指導観の理想的な経験の語りが少ないことなどである。

2.2 質的研究の動機

上のような研究の背景があり、タイにおける理想的な教師間協働の実態の解明のた

めに、なぜ、質的な研究方法が妥当なのか。それは、協働という研究対象の範囲が広く、またその実態が現実的で複雑な事象であるからである。協働の中では NT と NNT の活動が複雑に絡みあい、そこに多様な人間関係が生まれ、協働の実態を構成していく。そうした多様で変化のある事象を捉えるためには量的な研究方法よりも質的な研究方法の方が事象を正確に捉えることができる。では、様々に存在する質的な研究方法の中でなぜ SCAT を利用したのか。それは、第一に他の質的な研究方法よりコーディングの仕方が簡易でデータの規模から見ても妥当であると判断したからである。第二に本研究のように共同で分析を行う場合、SCAT で推奨しているように複数の視点²で多様な観点を内包する方が初学者にはよいという示唆があるからである（大谷 2008）。

3. 本研究の調査概要

3.1 調査の対象

今回の調査は、2 人の共同研究者が異なる複数の教育機関でインタビュー調査を行った。その調査対象者は表 1 の通りである。調査時期は、2015 年 8 月から 9 月にかけて 2 人の共同研究者が同時期に実施した。

表 1 調査機関と調査対象者

調査機関	調査対象者
高校 A・高校 B	NT1,2 と NNT1,2 (計 4 人)
日本語学校	NT3 と NNT3 (計 2 人)
大学	熟練 NT, NT4 と NNT4 (計 3 人)

教師間協働の研究では、協働を実践している NT と NNT の両者を調査対象にしている。タイにおける協働の実践には形態上いろいろな協働のあり方があるが、一つの教室に両者が同時に入る、いわゆる Team teaching の実践は経済的、合理的な事情から限られている。今回の研究では、調査機関における協働の定義を「NT と NNT とが授業や業務など幅広く一緒に仕事をする事」とした。これは、高橋他（2015）で整理されている「教師間協働の現場」の協働の在り方を最も広く考えるものであり、調査機関における協働を捉えるために最も有効な定義であると考えられる。

3.2 調査の方法

この研究では、次のように調査を実施した。はじめに一人 30 分から 1 時間ほどの半構造化インタビューを実施した。質問項目は事前に先行研究をふまえて共同研究者間で検討して、(1)対象者の属性および各自の現在の日本語教育の状況、(2)NT や NNT との協働の中で考えることや思うこと、(3)協働のためのコミュニケーションの取り方や工夫、各自が考える理想的な協働とは何かを聞いた。この主な質問以外にも、別紙に補足の質問も用意して回答に応じて適宜質問をした。高校のインタビューでは、は

じめに NNT と NT 両者に対して一緒にインタビューを行い、後から NT のみにインタビューを行った。

収集した NT と NNT の語りのデータは、すべて文字起こしを行い、文字媒体の資料を共同研究者間で共有した。具体的な分析方法は SCAT (Steps for Coding and Theorization, 大谷 2011) の分析手続きを利用することとした。調査の分析の焦点は「理想的な協働」なので、データの中のこれに関わる語句に着目した。構成概念を抽出する方法は大谷 (2011) のエクセルフォームに従い、着目した語句を順番に張りつけて、その語句から「注目すべき語句」、「語句の言い換え」、「テキスト外の概念」、「テーマ・構成概念」まで 4 段階の抽象化を行った。以下に、本研究の SCAT の分析結果の例を一つ挙げておく。

表 2 SCAT 分析結果：高校 A の NT1 の語り (一部)

テキスト	注目する語句	言い換え	テキスト外の概念	テーマ構成概念	疑問課題
私に関してはあの、そこまで腹を括ってきてますから	腹を括って	仕事への覚悟、気持ちを固める	後戻りできない状況への態度表明 (原因) 真面目 (背景)	真面目教師の覚悟	教師の資質?
いつでもお互いの授業の内容とか、学生のわかっている)	お互いの授業	お互いの授業、共通認識 (授業)	協働の実態 (帰結), 協働環境の有無 (背景)	協働による相互理解	
オフィスは一緒に	オフィスは一緒に	職場の状況, 二人の居場所	教育現場事情 (背景), 合理的配置 (帰結)	居場所としての職場	
情報は常に持っていますね。(中略) 常に話していますし、やっぱり情報を共有しないとうまくいかないんで	情報を常に持って、常に話しています、情報を共有	常時、いつも、いつもの情報共有	情報共有の必要性 (条件), 不断の業務 (帰結)	常日頃からの情報共有	
雑談しているような雑談してる感じ	雑談	雑談、おしゃべり、何気ない会話	人間関係作り (帰結), 気兼ねのない関係 (条件)	雑談感覚のコミュニケーション	他のデータにも?

4. 調査の結果

4.1 高校 A・B のデータから取りだされた構成概念

高校 A で働く男性の NT1 は、「おしゃべり好きな私」という特性に自覚を持ちながら、「雑談感

覚のコミュニケーション」をNNT1との間で上手に取り、すぐ近くにいつもいる協働相手のNNT1と「常日頃からの情報共有」を通じて、協働の実践を行っていた。実際の語りのデータ³の中には以下のような発言が見られる。

- (3) NT1 : 私は、そのときには居心地が非常によかったんです。(ああ、そうですか。) あの、いろんな人がいろんなことを話してますよね。(ええ) そういうのを聞いているのも好きだったし。
- (4) NT1 : 私、基本的には人が好きなので、だからあんまりその外国、言ってることがあんまり理解できなくても(はい)、その言ってる人を見て(はい) 楽しいなど。

このNT1は、日頃から協働相手のNNT1を含む職場の中でこの語りのように人好きで話好きな自分を自覚しており、協働相手以外のNNTともオープンマインドな態度を持って日々の仕事に従事していた。

また、共有される最も中心の情報は、NNT1との間における生徒の情報であった。この情報共有の方法にも特徴があり、日頃一緒にいるオフィスではもちろんだが、メールやLINEを使ったコミュニケーションが可能な協働環境にあることも重要な点であると言える。

- (5) NNT1 : 先生が、授業終わってから、私、も授業終わってから。(NT1 : うん) あ、学生のこと話しました。
- (6) NT1 : そう、あの、あの学生が。(NNT1 : ああ) 例えばテストが悪かったとか(NNT1 : ああ)、あと、家庭の問題とかですね。
- (7) NT1 : なんか問題があつて。(急に、うん) はい、ありますから、そういうときは常に。(NNT1 : 前は、メール。でも、い、今LINE) LINE ね。

協働に対する考え方の中で役割分担に対しては、次のような考え方をこのNT1は持っている。それは、基本的なところでは合理的な役割分担を意識するという「ベース型分担制」である。これは、日本人とタイ人の双方が持ち合わせている能力や得意な部分に合わせて分担するという考え方である。この分担は、複数の機関で見られる。

- (8) NT1 : ううん、ベースの部分としてはそういう、やっぱり能力に合わせて、あの、得意なところを分担する(うん)、というのはいいと思うんですが。

タイにおける協働の中の役割分担は、両者が持つネイティブ性に沿って無意識的に分けられていることが多いが、このNT1は「教育への責任感と覚悟」を持ち、自らの出自としてもともと「日本語教師ではない」という立場を強く意識して、生徒の教育を包括的に考えなければならないという「教師」の自己認識を強化して最終的には役割分担は責任の分化を招いてよくないという態度を示していた。

- (9) NT1 : 結局、分けることによって、それが、自分の責任はそれだけだと。その自分の責任のない部分に関しては、あなたの方ですよっていうふうになってしまうのであれば(うん)、それは、よくないと思います。
- (10) NT1 : そういう意味ではベースの部分は分けても、全体の部分に関しては、みんなでしっかり責任を持ってやっていかなければいけないと思います。

この他にもこのNT1に特徴的なことは、NNT1との協働の中では自分自身をNNT1

の日本語力を維持するための「日本語キーパー」や「日本語トライの応援者」という役割を自覚していたり、「ありのままの自分」という地の部分を無理せず自然に意識したりすることであった。

一方、高校 B の NT2 について見てみると、まず気が付くことは高校 A の場合と同様に NT と NNT の間には、お互いのことをよく知るためのコミュニケーションに十分な時間が掛けられているという点である。この部分は、高校 A と全く同じで連絡ノートのようなものは存在せず、今は LINE がコミュニケーションの手段として利用されていた。そして、お互いに言いたいこと、言うべきことを伝えあってもいる。

- (11) (連絡のノートみたいなはありませんか。) NNT2 : ありません。NT2 : あ、もし、でも、伝えたかったら LINE かな。
- (12) NNT2 : はい、相談します。何か、活動も活動も何かしたとき、相談します。
- (13) NNT2 : いつも言います。例えばちょっと何か問題が、小さい問題があるとき (はい)、いつも先生と相談します。NT2 : ああ (そういうとき) NT2 : うん、何でも何でも結構、何でも何でも言うてくる。ふふふふ。

このことは NNT2 が NT2 に対して仕事上で信頼感を持ってていることを示すものであり、NNT2 からの承認の証であると理解できる。先行研究ではこれに関して、協働の3年目を過ぎると NNT から NT への承認が得られやすいという報告 (中山 2016) を出しているが、本研究の調査対象の高校 A・高校 B の日本人は勤務期間が長いため、タイ人と間に十分な信頼関係が築けているのであろう。

もう一つ本研究の高校の中で共通している点は、NT のタイ語使用であった。調査時には、高校 B の NNT2 が日本語に自信がない様子を示しており、語りの中では次のように NT2 のタイ語の使用について、その都合のよさに言及していた。

- (14) NNT2 : はい、タイ語で話しました。(中略) はい、楽。ふふふふ。

NNT2 からすれば母語であるタイ語の使用が許され、コミュニケーションが取りやすいキャラクターである NT2 が相手であれば、協働を促進する環境は理想的なものであると言えよう。NT のタイ語の使用によって、NNT からの「協働への可能性」の理解が進んだと思われる。NNT2 からは、NT2 のことを「タイ人みたい」と形容されるように NT2 は「タイ現地化」している点も見逃せない。

- (15) NNT2 : 話しやすい、なんかタイ人みたい。(中略) 日本人じゃなくて。
- (16) NNT2 : (日本人と一緒に仕事するのは?) 好きです、ふふ。

4.2 日本語学校のデータから取りだされた構成概念

タイにおける日本語教育の現場には上に述べた高校の他に民間の日本語学校や大学がある。ここでは、民間の日本語学校で働く調査結果をまとめる。

はじめに指摘したいのは、高校で理想的な教師間協働を経験していた NT の一人が持ち合わせていたアイデンティティについての類似点である。日本語学校で働く NT3 にも、もともとの出自について「日本語教師じゃなかった」という概念を抽出することができた。この NT3 は、タイに来る前には日本で一般企業で勤めた経験を持っており、日本語教師としてのアイデンティティも薄いものであった。

(17) (先生、大学卒業してすぐここだったんですか?) NT3: 大学卒業して、3年日本の企業で働いて。

また、このNT3は次の(18)のようにも語り、タイに来てから1年はタイ語の勉強に興味を持ちながら自分の語学学習を続けて、外国や外国人を相手にする仕事の一つとして漠然とした気持ちで日本語教育の現場に足を踏み入れたという。日本語教育の専門的な知識は「全く勉強していない」とも語っていた。

(18) (タイの日本語教育をということですか?) NT3: そうですね、そのときはもっと漠然と、先生の仕事に興味があった程度なんですけど。

日本語教師としてのアイデンティティに対してそれほど明確なものがなくても、逆にこのNT3は自らの一般企業での経験、社会人としての経験を十分に生かして日本語教育に従事するタイプの日本語教師となっている点が興味深い。日本語教育の専門性を持たず、初めてタイで日本語を教えたときも「限られたカリキュラム」の中でならできるという「日本語教授に対する自信」を持ち、業務遂行の能力を有していた。

さらにこのNT3は、この職場において主任という立場にあることから「日本人とタイ人の仲介的な存在」になって両者に「中立的な立場」で接するようにしているという。それは、次の語りが示すように「タイ人と日本人の対等性・平等性」という仕事観を持ち合わせていることが根底にあると思われる。

(19) NT3: 個人的に誰かとあまり仲良くなりすぎないようにはしているんです、立場上。基本的には平等に。僕は日本人の意見だけ聞いて、タイ人の意見を聞かないのは不公平だと思うんですよね。

(20) NT3: 特にこの学校だとタイ人だからとか、日本人だからってというのはあまりないです。(中略) 理想を言えば、すべての先生が、すべてのクラスを教えられるというのが理想です。日本人も、すべてが文法を教えられる。タイ人の先生も、すべてが会話を教えられるという、できれば、それがベストですよね。

このNT3の考え方はさらに発展して、従来の日本人だからとかタイ人だからとかいうネイティブ性を越える協働観に繋がっているようである。それを示す次のような語りがあった。

(21) (特にネイティブだからとか、ノンネイティブだからじゃなくって) NT3: じゃなくって、本当に、たとえば、タイ人の先生がすごい、日本人のように話せれば理想なんですけども、それはいかないんで。

本研究の調査対象者である日本語学校と高校のNTには理想的な協働や教育現場での自らの能力の発揮に関して、共通点がいくつか存在している。それは、タイ語能力とタイへの適応力である。どちらの機関においても、タイ人との間のコミュニケーションではタイ語の使用が認められ、タイ人と同じようだと形容されるくらいに適応していることから、タイ人からの承認や仕事上の信頼感が得られていた。

日本語学校のNT3の理想的な協働は、企業から学んだ組織感覚をうまく日本語教育の現場に当てはめて平等性・対等性を基調とした協働観を持ちながら、日本語教師アイデンティティに縛られない立場で仕事をするとともに実現されていると言える。

日本語学校の協働を支える観点として、補足して述べたいのは、この機関で働く

NNTにはこの学校の卒業生が含まれているという点である。つまり、そのNNTはこの機関のNTの教え子であり、信頼感のある人間関係を築いているということである。この機関で学ぶタイ人学習者にとっては、そのNNTは身近な学習モデルでもあり、同僚のNTからも学習者からも信頼感を得る存在であるという点は、この機関の特徴であると言えよう。

4.3 大学のデータから取りだされた構成概念

高校、日本語学校に続いて、ここでは大学における日本語教育の現場の理想的な教師間協働を分析する。

大学で理想的な教師間協働の実績がある本調査の対象機関には、これまで見てきた高校や民間の日本語学校と同様にNNTとNTとの間で十分な「情報共有の場」と「対話できる環境」が整っていた。例えば、この機関の熟練NTは、新しい教員を募集するときからの学科内のオープンな環境を次のように語っていた。

(22) 熟練NT：(注：他の学科では) 授業見せてくださいなんて、全部拒否されます。(中略) 日本語学科は一切ありません。(お互いオープンなんですか?) オープンです。(ほお、いつでも授業をお互いに?) 大丈夫です。

同じ職場で仕事をしているNNT4からも次のように学科内のオープンな状況から積極的に授業研究への意識を持てるという語りがあった。

(23) NNT4：昔はお互いの授業見学、特に協働の先生(注：以前の協働相手)はできるだけ、相手はどんな進め方なのかも見て、参考になりますね。

また、このNNT4は、次のように職場において日本人と情報共有をするために「連絡ノート」のようなツールを駆使して仕事を共有するとも語っている。

(24) NNT4：(ノートの方がいいですか?) ノートありますね、連絡ノート。授業終わった後、ちょっとメモ。

理想的な教師間協働が実現できる環境があるとすれば、この情報共有の土壌や協働の利点への理解が必要になると思われる。

協働における役割分担の前提として、この大学で働く熟練NTには学科内におけるTeam teachingへの理解があることも大きな特徴であった。それは次のような語りに表れている。

(25) 熟練NT：だから、私もね、まず、「和」っていうものを考えています。(中略) これこそTeam teachingだと思っています。(中略) それが先生(注：調査者)の言う協働にあたるかどうかは難しいですけども、だから、先生(注：同僚)の間がまず仲良くなきゃいけない。これが第一条件だろうと思っているんです。(うん、そうですね。) 少なくとも、けんかしない。仲良くなきゃいかん。

そして、こうしたNTのいる職場で、NNTは、この日本人の持つ精神性に保証された環境の中で「タイ人と日本人の対等性・平等性」を感じながら一緒に仕事を進めている。

(26) NNT4：我々の学科としては、日本人の先生を特別扱いではなく、タイ人の先生は日本人の先生のお手伝いではないんですね。みなさんは、平等。

実際の協働の仕方としては、合理的な考え方から(27)のような「明確な役割分担」があり、それをベースにしつつ仕事への「責任の所在」を明らかにする職場の雰囲気もあって、それが協働を理想的なものにする契機となっているようである。

(27) NNT4 : まあ内容は、それは、だいたい単語の導入とか、文型導入。で、日本人の先生は練習とか活動を取り入れたりとか。

この大学のような環境には、NNTからもNTからも「協働のよさへの理解」が見られ、理想的な協働の土壌があると言える。これは、長い経験を有する熟練NTが「タイ人と日本人の仲介的な存在」になっていることや若手の日本人が日本の大学の先輩（「OB・OGの存在」）から引き継いで採用されている機関であることなどが理由として考えられる。

こうした理想的な協働の環境に育まれて、片桐他（2011）でも指摘されていた「成長する教師」モデルに合致するようなNNTが存在する。NNTから「協働の可能性」への前向きな姿勢が見え、今後もこのような職場環境が続けば、理想的な教師間協働は、引き続き可能となると思われる。

5. 考察：理想的な教師間協働に関するストーリーラインと理論仮説

5. では、分析を通じて得た概念から、その概念同士の関係を考慮して理想的な教師間協働の出来事をストーリーラインにしたい。ストーリーラインとは、大谷（2011）によれば、「データに記述されている出来事に潜在する意味や意義を、主に<4>⁴に記述したテーマ⁵を紡ぎ合わせて書き表したもの」（大谷 2008）と定義されている。

本研究の3.2の表2で示したような実際の語りのデータから脱文脈化して抽出した概念を関連づけて、理想的な教師間協働の事実を把握するために再文脈化する作業がこのストーリーラインの作成である。

本研究で抽出された概念のうち、各機関で理想的な協働の経験上、特に重要な概念は、「情報の共有」、「雑談のようなコミュニケーション」、「コミュニケーションの場と機会」、「仕事や協働への相互理解」、「日本語教師の自己認識」、「教育への責任感と覚悟」、「タイ語能力」、「タイ現地化」、「協働の可能性への理解」「タイ人と日本人の対等性・平等性」であった。十分なコミュニケーション能力（タイ語能力）と場があり、情報の共有が可能であれば、その結果、NNTとNTがお互いの仕事や協働への理解を深めるに至る。NTの出自は日本語教師でなくてもよく、理想的な協働の経験を通して「教師」としての自己認識が再形成される。一方、NNTは、NTと共に仕事をする中で協働上の対等性や平等性に気づくようになり成長する。

【理想的な教師間協働を経験している日本語教師のストーリーライン】

理想的な協働を経験するNTは、日頃NNTとの仕事の中で、日本語も使用した雑談のようなコミュニケーションや情報共有を通じてお互いの仕事や協働への理解を深めていく。そして、「日本語教師」の自己認識をこえた「教師」としての自己認識に至り、教育への責任感と覚悟を強化する。また、日本語教師では「ない」立場から、日本語教師に「なる」過程の中で協働に適応できる立場や能力を獲得する場合がある。同時にNNTにも協働の可能性や協働上の対等性・平等性への気づきがある。

さらに、このストーリーラインから、理論仮説を記述したい。理論仮説とは、これも大谷（2011）にならい、「ストーリーラインを断片化すること」、「普遍的で一般的に通用する原理のようなものではなく『このデータから言えること』』とする。本研究で得られたストーリーラインから理想的な教師間協働を経験している機関の NNT や NT に言えることを理論化すると、次のようになる

【理想的な教師間協働を経験している日本語教師の理論仮説】

- ・理想的な教師間協働は、情報共有と不断のコミュニケーションを通じて、NNT と NT の相互理解の中ではなくまれる。
- ・理想的な教師間協働は、NT の「教師」としての自己認識を再形成する。
- ・理想的な教師間協働は、NT 及び NNT の「協働の可能性」への気づきにつながる。

6. おわりに

本研究では、タイの日本語教育機関で一緒に働く NNT や NT に対して、お互いの仕事や協働に関する様々なことをインタビュー調査し、その語りのデータを質的に分析して、理想的な教師間協働の経験に関する重要な概念、それらに関連づけたストーリーライン、さらに理論仮説を記述した。

日本語教育の成熟期を迎え、新たな展開を推し進めているタイにおいて、そこで活躍する日本語教師らは NNT も NT もどのお互いの仕事や特性の理解を深め、実りの多い日本語教育を実現することができるだろうか。教師間の協働という営みをよりよいものにするために本研究の結果が少しでも役に立つものになれば幸いである。

謝辞

インタビュー調査にご協力をいただいた各機関のみなさんに心よりお礼を申し上げます。本研究は、JSPS 科研費基盤研究(C)課題番号 26370613（研究代表者 中山英治）の助成を受けています。

注

- 1 本研究の背景で引用されている先行研究の記述に使われている各種記号（例：『正確さ』、《役割》、【情報共有】など）は、その研究で使用されていた概念やカテゴリーを表す記号である。
- 2 本研究では、研究代表者 1 名、研究分担者 1 名、研究協力者 1 名の計 3 名の分析者が分析にあたった。
- 3 語りのデータを例示する際は、例文の前に調査対象者の属性を表 NT/NNT を示した。また、例文中の（発話）は、調査者の発話を示し、（NT/NNT：発話）はインタビュー時に参加していた NT と NNT を示している。高校の語りでは NT と NNT が連続して話す場面を含んでいる。数字のない NT/NNT は一般の教師を示す。
- 4 この〈4〉は、大谷（2008）の「テーマ・構成概念」の段階を示している。
- 5 ここで言う「テーマ」は、上記と同様に大谷（2008）の「テーマ・構成概念」のテーマの意味である。

参考文献

- 池谷清美・中山英治・片桐準二・カノックワン ラオハブラナキット片桐(2009)「タイ人教師と日本人教師の日本語教育協働現場における課題—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルから—」. 2009年度豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会配布資料
- 大谷尚(2008)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)54(2), 27-44. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- 大谷尚(2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」. 『感性工学(Vol.10 No.3)』 155-160. 日本感性工学会
- 片桐準二・Kanokwan Laohaburanakit KATAGIRI・池谷清美・中山英治(2011)「タイ高等教育の日本語教育協働現場における「成長する教師」の可能性—タイ人教師が経験する協働現場の実態分析からの考察—」. 『国際交流基金バンコク日本文化センター』第8号, 35-44. 国際交流基金バンコク日本文化センター
- 香月裕介(2011)「2011年9月 タイ人教師と日本人教師の役割形成から生まれる「つながる」動き—タイ国R大学日本語学科を例に—」. 『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第8号, 45-54. 国際交流基金バンコク日本文化センター
- 門脇薫編(2015)『海外における日本語非母語話者と母語話者教師の協働に関する基礎的研究』科学研究費研究成果報告書(中山英治・高橋雅子との共著)
- カノックワン・ラオハブラナキット片桐(2010)「日本人教師と協働したタイ人教師の体験と本音—『正確さ』重視の「指導観」を中心に—」. 『大阪大学フォーラム2009報告書 東南アジアにおける日本語・日本文化教育の21世紀的展望—東南アジア諸国と日本との新たな教育研究ネットワークの構築を目指して—』 40-46. 大阪大学フォーラム2009実行委員会
- 高橋雅子・門脇薫・中山英治(2015)「教師間の協働に関する研究の状況—海外での日本語教育における非母語話者教師と母語話者教師の協働に関する文献調査—」. 『海外における日本語非母語話者と母語話者教師の協働に関する基礎的研究』 51-60. 科学研究費研究成果報告書
- 中山英治(2016)「タイにおける日本語教師間の協働モデルの再構築—日本語母語話者教師へのインタビュー調査に基づいて—」. 『大阪産業大学論集 人文・社会科学編 28』 75-91. 大阪産業大学学会
- 松尾憲暁・香月裕介・井上智義(2014)「日本人教師はタイ人教師とともに働くことをどう捉えているか—量的調査と自由記述の分析から見えること—」. 『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要 第11号』 111-12. 国際交流基金